

公開・国際シンポジウム「イメージとヴィジョン 東西比較の試み」

和装羅刹女像の生成 ——宋と日本への二つのヴィジョン

増記 隆介

はじめに

本稿は、「和装羅刹女像の生成——宋と日本への二つのヴィジョン」として、国際シンポジウム「死生と造形文化Ⅲ イメージとヴィジョン 東西比較の試み」（2011年2月13日於東京大学）において口頭発表した内容に加筆したものである。はじめに、この小稿において、今回のシンポジウムのテーマである「イメージとヴィジョン」をどのように規定しているかを記しておきたい。

まず、イメージについては「具体的な造形」、仏教絵画史という筆者の専門分野から、二次元の絵画表現を指すものとする。また、ヴィジョンについては、「具体的な造形に結びつく対外意識をも含めた自己認識のあり方」としたい。具体的には、我が国の平安時代後期、12世紀中頃に生成したと見られる和装羅刹女像におけるこの二者の関わりを「扇面法華経冊子」、「平家納経」という二つの作例を通じて概観する。以下、本題に入ることとしよう。

課題の確認

我が国の法華経美術の歴史において、平安時代後期から鎌倉時代を中心に「普賢十羅刹女像」と呼ばれる一連の画像が描かれたことは、当該期の公

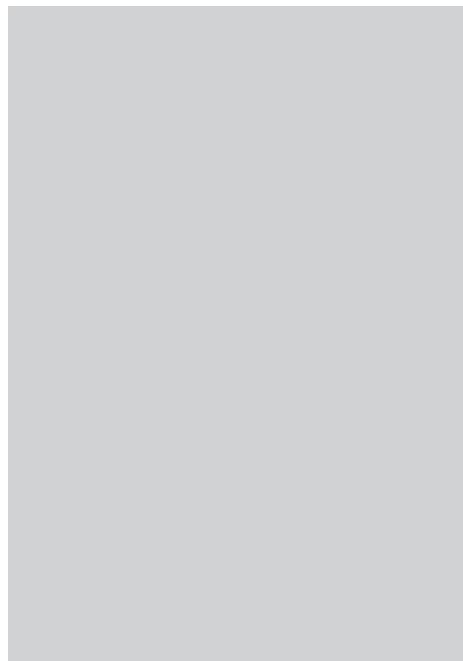


図1 普賢菩薩像(部分)、東京国立博物館

卿日記等、記録の上からも知られ、現存作例も20点余りを数える¹。『法華経』『普賢菩薩勸発品第二十八』と『観普賢菩薩行法経』に説かれる法華経信仰者のもとへの普賢菩薩の影响、これを絵画化した最も著名な作例として東京国立博物館本(図1)があるが、これに同経「陀羅尼品第二十六」に法華経信仰者を擁護すると説かれる二菩薩、二天王、十羅刹女、鬼子母を合わせ描いた普賢十羅刹女像の図像は、これを説いた経軌が知られていないことからその成立過程について様々な議論がある²。

この点に関しての現時点での筆者の見解は、以下のようなものである。

11世紀末から12世紀初期に活躍した天台座主・忠尋(1065～1138)『法華文句聞書』第一(大日本仏教全書)によれば、法華三昧法³の場において行者を守護するために十羅刹女を勧請するものとされている。この行法の本尊は普賢菩薩であり、ここに普賢菩薩と十羅刹女が一つの場に登場することとなる。これを我が国における十羅刹女像の造像史料に照らしてみると、その造像の初見が、承暦3年(1079)の再建法成寺釈迦堂の扉絵に「十六羅漢」、「多聞持国天」とともに描かれたものであり(「法成寺塔供養願文」、『本朝続文粹』)、行法の場を守る存在として十羅刹女が位置づけられていたことを想像させる。具体的な作例としては、天永3年(1112)創建の兵庫・鶴林寺太子堂の柱絵に描かれたものが最古であり、十羅刹女の彫像の例(京都・実

光院、山形・本山慈恩寺)があることから、行者を守護するものとして十羅刹女が普賢菩薩を本尊とする堂内の壁扉や柱に描かれ、また、彫像として安置されたことが、我が国における普賢十羅刹女像の図像の成立に寄与したことが推察される。

ただし、普賢十羅刹女像の図像が我が国で独自に成立したとは言い難く、その図像の成立を促すような絵画作例が中国唐から宋の遺例にあった可能性は高い。具体的には普賢菩薩に天女形が随伴する図像が、法門寺「銀鍍金仏菩薩像函」(唐・咸通 15 年 (874)) や北宋 10 世紀後半の「普賢菩薩像」(ギメ美術館)、元の「法華經变相図勸発品」(香川・道隆寺)に認められ、これらが普賢十羅刹女像の図像の先蹤となった可能性は考慮されるべきであろう。あわせて、保延 7 年 (1141) の福岡県出土「金銅製輪積経筒」の表面には普賢十羅刹女が線刻されるが(図 2)、この経筒の底面には「陳□」の墨書があり、博多在住の宋人がその埋納に関与したとみられ、普賢十羅刹女像の図像が宋人にとっても違和感のないものであったと考えられることは重要である⁵。

さて、我が国における最古の絹絵の例としては 12 世紀後半の京都・廬山寺本が、これに続いて根津美術館本(図 3)がある。これらの作例では、羅刹女が「羯磨衣」等の唐風の衣を着けているが、他方で羅刹女を「女房装束」姿に描くものがある。13 世紀前半の旧益田家本(図 4)を現存最古の例とするが、羅刹女のみを和装で描いたものに先行作例が存在する。

すなわち、柳澤孝氏によって、仁平 2 年 (1152) の制作と想定されている⁶「扇面法華経冊子」表紙絵(図 5)、及び長寛 2 年 (1164) 供養の「平家納経」のうち「從地涌出品第十五」「觀普賢経」(図 6、7)の見返絵がそれである⁷。これらの作例で羅刹女が和装化することについては、従来、我が国における法華経信仰を牽引した女性貴族の信仰の高まりが、自らの姿になぞらえた羅刹女像を生み出したものとされてきた。そのような理解は大方において正しいと思われるが、この 12 世紀半ばの二つの作例においては、二つのイメージがどのようなヴィジョンから生み出されているかをより具体的に

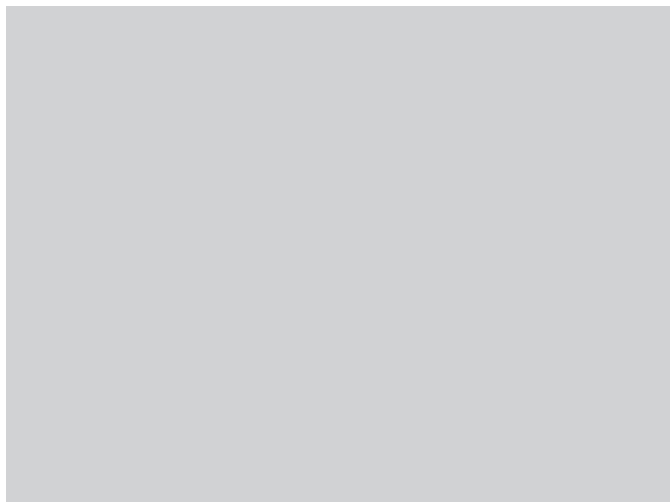


図2 《金銅製輪積経筒》(展開図)、奈良国立博物館

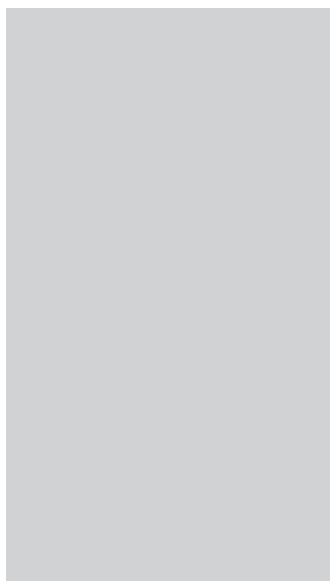


図3 《普賢十羅刹女像》、根津美術館

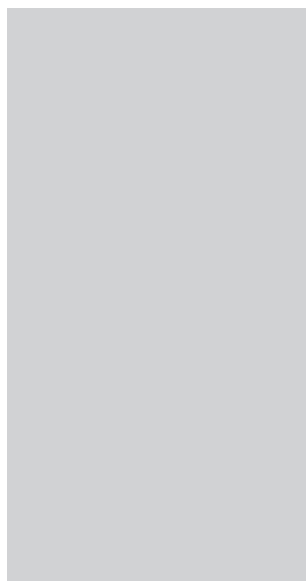


図4 《普賢十羅刹女像》(益田家旧蔵)

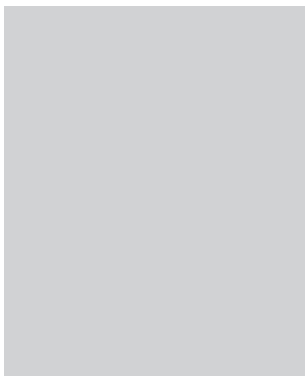


図 5-1 《扇面法華經冊子》
無量義經、表紙絵、四天王寺

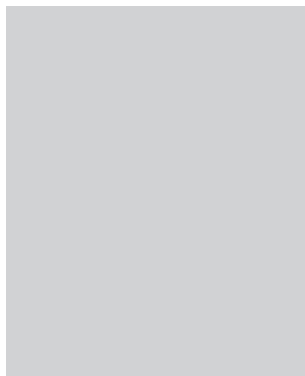


図 5-2 《扇面法華經冊子》
卷 6、表紙絵、四天王寺

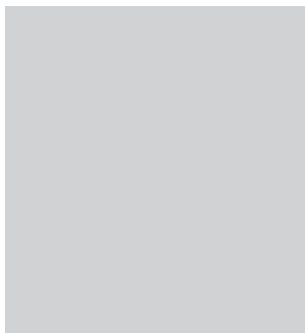


図 5-3
《扇面法華經冊子》
卷 7、表紙絵
四天王寺

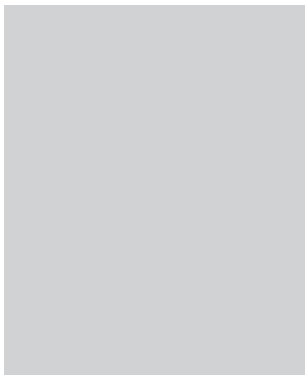


図 5-4 《扇面法華經冊子》
卷 8、表紙絵、東京国立博物館

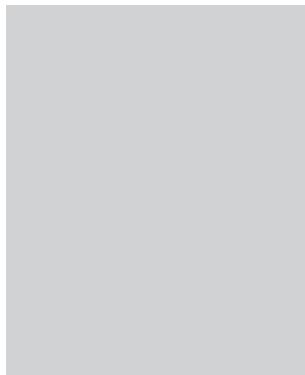


図 5-4 《扇面法華經冊子》
觀普賢經、表紙絵、四天王寺

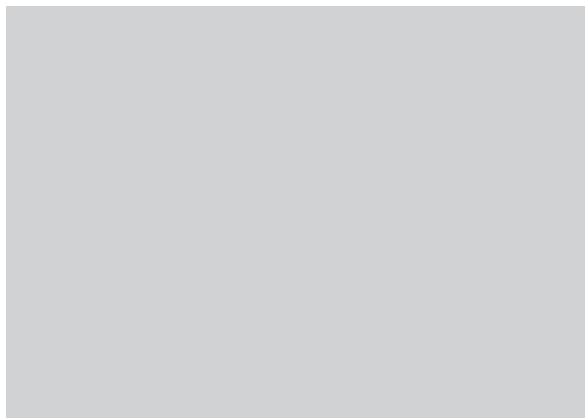


図6 《平家納経》
従地涌出品
厳島神社

図7 《平家納経》
観普賢経
厳島神社



追うことができるように思われる。以下、具体的に考察したい。

扇面法華経冊子の場合

現在、大阪・四天王寺（無量義経、巻1、6、7、観普賢経）及び東京国立博物館（巻8）に所蔵される「扇面法華経冊子」のうち巻1を除く5帖の表紙には和装の羅刹女像があらわされている。この作品については、鳥羽上皇

の後である高陽院泰子（1095～1155）が薨願、仁平2年（1152）9月13日、鳥羽上皇（1103～56）と高陽院の弟である藤原頼長（1120～56）が臨席した四天王寺における舍利会に際して供養されたとする想定が柳澤孝氏によって提出されている⁹。本稿では、以下「扇面法華経冊子」というイメージを生み出したヴィジョンを確認するが、このことによって、併せて、この柳澤説が妥当なものであることを指摘したい。

「扇面法華経冊子」は、扇を料紙とし、これに我が国の風俗を中心とする絵画を描き、法華経を書写したものである。ここでは、扇、絵画という二つの具体的なイメージにこめられたヴィジョンについて考えていくことから始めたい。

扇という形態に仏教的な意味があることについて、永観2年（984）源為憲『三宝絵』『僧宝の二十四』に『正法念経』にいわく、僧をみて扇をほどこして涼しくして経法を読み誦せしむるは、命終わりて風行天にむまる」とあり、『正法念処経』（大正蔵巻17）に僧への扇の布施が「風行天」に生まれる善行とされていたことが知られる。藤原北家の最盛期を導いた藤原道長（966～1027）は、万寿元年（1024）10月、その女である後一条天皇の中宮威子（999～1036）が行った多宝塔及び法華経供養の折に、12人の僧に紫の扇に能筆として知られた藤原行成が法華経を書したものを布施としたことが知られ（『栄華物語』）、高陽院自身も仁平2年（1152）5月に6人の僧に「扇紙廿五枚」を与えたことが知られる（『兵範記』）。

さらに、当該期において扇が対外的に特別な意味を持っていたことを想起する必要がある。すなわち、北宋11世紀の郭若虚『图画见闻志』巻6や南宋12世紀の鄧椿『画继』巻10に記されるように、我が国の扇が「倭扇」として宋において「近歳最も秘惜すべき」ものとされており¹⁰、例えば、承安元年（1172）に入宋した園城寺・覚阿の帰国後、その師である覚忠が杭州靈隱寺の恵恩に対し「綵扇二十」を送ったこと（『嘉泰普燈録』巻第20¹¹）は宋と日本の仏教交流の場に扇があらわれたものとして注目される。

「扇面法華経冊子」に描かれた絵画については、白畑よし氏によって、絵の上に記された経文の内容を反映し、同時に『万葉集』を中心とした和歌の

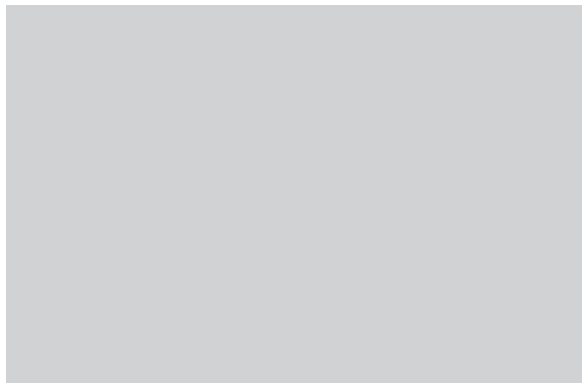


図8 《久能寺経》
薬草喻品

判じ絵ともなる複雑な構造を持つことが指摘されている¹²。その指摘の当否については、今後の研究に俟たれるところが多いと考えるが、和歌が法華経と我が国の風俗を描いた絵画を結びつける働きをしたことは、以下の諸例からも予想されるところであろう。

藤原有国（943～1011）「法華経二十八品を賛ずる和歌の序」によれば、我が国における法華経を詠じた和歌の濫觴は、11世紀初頭に藤原道長の周辺において法華経二十八品を詠じたことにあるとされている¹³。また、寛弘9年（1012）には選子内親王『発心和歌集』が成立し、これには法華経歌29首が含まれる。そして、この法華経各品に因んで詠まれた和歌、すなわち一品経和歌の内容が、法華経の経文に代わり、一品経見返絵の主題となったことが知られ、経文の内容（＝法華経のテキスト）の絵画化が和歌を媒介に我が国の風俗に開かれていった様を伺うことが出来る¹⁴。例えば、藤原俊成（1114～1204）『長秋詠藻』の法華経薬草喻品第五を詠じた「春雨はこのものかのもの草も木もわかずみどりに染むるなりけり」が「久能寺経」薬草喻品の見返絵（図8）の内容とよく一致することが知られている¹⁵。このように「扇面法華経冊子」の絵画は、道長以来の一品経和歌を通じた法華経と世俗画の結びつきとが生み出したものといえよう。

一方で「扇面法華経冊子」には、中国絵画の摂取が認められることも指摘しておかねばならない。ここでは具体的にいくつかの例をあげておきたい。

図9 《扇面法華経冊子》巻6(部分)

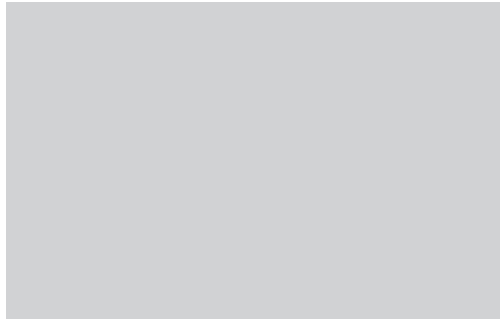
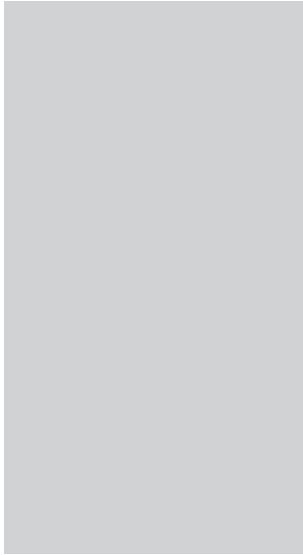
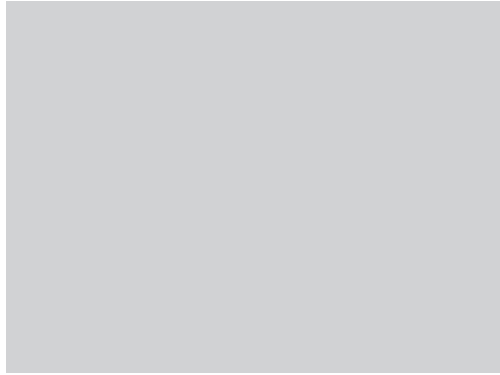


図11 《扇面法華経冊子》巻6(部分)

図10 崔白《双喜図》台北・国立故宮博物院

第一に巻6第4扇の柏の木にとまる鷹と2羽の兔を描いた図(図9)について。これについては夙に中島博氏の指摘があるが¹⁶、その図様は、北宋・嘉祐6年(1061)の崔白「双喜図」(台北・故宮博物院、図10)の構成を明らかに想起させる。そのような視点に立って「扇面法華経冊子」を概観すると、同巻第10扇の雪中の蘆に2羽の白鷺を配した図様(図11)についても、作品は現存しないが、『宣和画譜』に著録された崔白の弟・崔慤の2点の「寒蘆雪鷺図」やさらに遡って徐熙の3点の「寒蘆双鷺図」といった作例とその



図12 《扇面法華經冊子》巻1(部分)



図13 《伏生授経図》
大阪市立美術館

図様が全く無関係とは思えない。その鷺の形態が、小川裕充氏が東アジアにおける画鶴の継承関係として詳細に跡づけられた、薛稷（649～713）、黄筌（?～965）以来の「六鶴図」の六つの形態のうちの「唳天」及び「啄苔」に倣うことも、その図様が東アジアの花鳥画史に連なるものであることを推察させるに充分であろう。

また、巻1第9扇の男性貴族と童女を近接拡大して描いた著名な図（図12）についても、同時代的にも珍しい人物を大きく描くあり方には、伝王維「伏生授経図」（大阪市立美術館、図13）のような作例への視線が存在したことを推察させる。さらに、これはかなり大胆な指摘だが、「扇面法華經冊子」に市の光景が度々描かれる（図14）ことと、伝張昉「清明上河図」（北京・故宮博物院、図15）のように都の風物を詳細に描いた絵画が北宋の

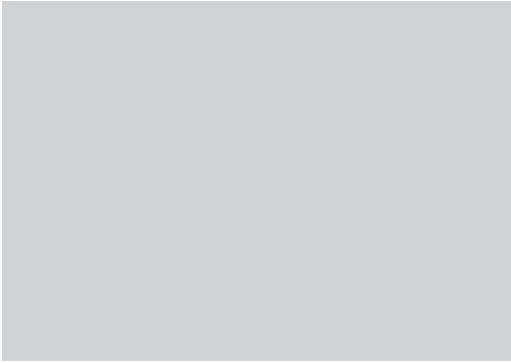
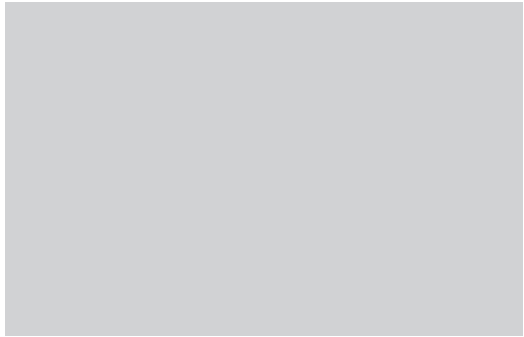


図 14 《扇面法華經冊子》巻 7 (部分)

図 15 伝張昉端《清明上河図》
北京・故宮博物院



後期に描かれていたことと全く関係がないとは言い切れないように思われる。このように、従来余り指摘されていないことであるが、「扇面法華經冊子」の絵画には、中国絵画の受容が認められることを銘記しておきたい。そして、それらは扇面という和の表象の中に巧みに包摂されている。

以上で概観したように、「扇面法華經冊子」の扇と絵画というイメージ形成には、布施としての扇、和歌の詠題としての『法華經』等、藤原道長以来の藤原摂関家の法華經信仰を回顧しようとする内的なヴィジョンと宋を意識した外的なヴィジョンの二者の存在することが理解されよう。前者について、道長は「日本国に法華經のこれほど広まり給ふ事は我が力なり」と自負したことが知られる（平康頼『宝物集』）。そして、後者を生み出したものとして、

道長の法華經信仰の背後には、呉越国・北宋を中心とした天台宗優遇政策が、日本、高麗との天台教籍の授受という形で外交と深く結びついていたことをうけて、藤原北家がこれに同調するべく、我が国の比叡山を掌握することによって外交の主体が藤原氏にあることを対外的に示す意図のあったことが指摘されている。¹⁸ これらのことから、「扇面法華經冊子」を生み出した二つのヴィジョンは、いずれもが、藤原道長を照射しており、その事績を表象するに相応しいものとして、一つの造形イメージに収斂していったものと考えられる。そのような中で、宋という外へのヴィジョンの存在が、逆に自らの内へのヴィジョンが強く立ち現れることを後押しすることとなり、その結果として和の表象を明確化すべく、「扇面法華經冊子」の扇形の表紙における羅刹女の和装化が果たされたものと推察される。

さて、先に述べたように「扇面法華經冊子」制作については、柳沢孝氏により高陽院の発願によるものと推察されているが、以上のヴィジョンを確認することにより、そのイメージを具体的に指示したのは、和漢の学に秀でた藤原頼長であったように思われる。¹⁹ 例えば、頼長は、若き日に父忠実とともに四天王寺に参籠し、「天下を撰録」することを祈願している（『台記』康治2年（1143）10月22日条）が、その執政後、「御堂（筆者註＝道長）以後、未だ行われざる」東三条殿季御読経（『兵範記』仁平2年（1152）8月18日条）²⁰ や「近代行われざる」法成寺法華講（『台記』久寿元年（1154）9月1日条）²¹、「七十年以来絶えて行われざる」東北院十種供養（同久寿2年4月5日条）²² 等の道長所縁の仏事を次々と復興していることが知られる。また、その日記である『台記』には、自らと道長とを一体視する記述が認められる。²³

そして、柳澤氏が「扇面法華經冊子」の制作契機に想定された仁平2年9月の四天王寺参詣は、頼長執政後初めてのものであった。このような場合は、以上で見てきたような二つのヴィジョンがイメージとして立ち現れるのに最も適した場であったように思われる。そして、これまで指摘のないことだが、この想定される供養の場にこれから述べる「平家納経」の制作を発願した平清盛（1118～81）とその願文の起草者である藤原俊憲が登場していたことは²⁴ はなはだ興味深いことと言わねばならない。²⁵ すなわち、「平家納経」を生

み出した場にもこのような二つのヴィジョンが継承されていた可能性があるのではないだろうか。以下この点を造形的に確認していきたい。

平家納経の場合

次に「平家納経」の場合について考えていくが、周知のように「平家納経」33巻のうち「従地涌出品第15」と「観普賢経」の見返しに和装の羅刹女が描かれている。いずれも右手で剣、左手で水瓶を執り、『法華十羅刹法』の記述からは、十羅刹女のうち「第五黒齒」をあらわしていることがわかる。

ここでまず注目しておきたいのは、「従地涌出品」の黒齒（図16）が「扇面法華経冊子」巻8表紙の「第八持嬰路」羅刹女の形態を反転したもの（図17）と一致することである。さらに詳細に観察すると、表着の黄色地に丹の藻唐草文、唐衣袖の群青の四つ菱入り石畳文という細部の文様表現まで一致することがわかる。一方「観普賢経」の黒齒（図18）については、「扇面法華経冊子」表紙に共通した形は見出せないが、²⁶「扇面法華経冊子」表紙絵と図樣的な関わりの深い旧益田家本普賢十羅刹女像²⁶には、この黒齒に特徴的な形態である上方を見る同様の形の羅刹女があり（図19）、かつ「扇面法華



図16 《平家納経》従地涌出品
黒齒羅刹女（部分）

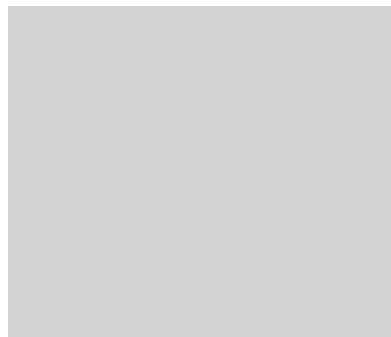


図17 《扇面法華経冊子》巻8 表紙絵
持嬰路羅刹女（部分・反転）



図 18 《平家納経》観普賢経(部分)

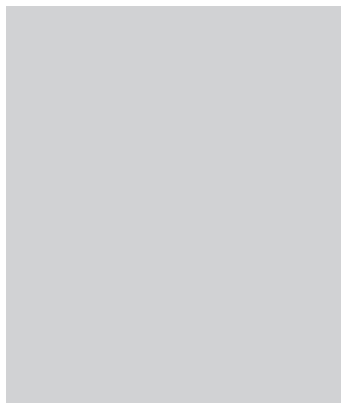
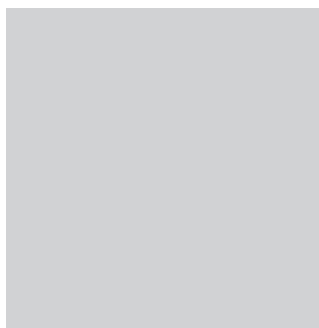
図 19 《普賢十羅刹女像》(益田家旧蔵)
(部分)

図 20 《扇面法華経冊子》 卷六(部分)

経冊子」巻6第1扇(図20)には、これと様式的に近似する女性像が描かれており、既に失われた「扇面法華経冊子」巻1から5の表紙絵にこのような羅刹女が描かれていた可能性が高いものと推察される。以上のことから、ここに和装の羅刹女における「平家納経」と「扇面法華経冊子」のイメージの共有が確認されよう。では、イメージの共有はヴィジョンの共有に結びつくものであろうか。

ここでは、まず、なぜ一つの一品経の中に同一の羅刹女が繰り返し登場するかについて考え、「平家納経」を生み出したヴィジョンについて考える端緒としよう。詳細な考証については、別稿に記したので、ここでは省くが、興然(1121～1203)『五十卷鈔』第12には羅刹女が「往古の如来の化身」であることが説かれている。すなわち、十羅刹女の本来の姿は胎藏曼荼羅中台八葉院の諸尊であり、第五黒齒については「中央大日如来の化身」であるとされている。²⁸同様の説は澄円(1218～84?)『白宝抄』や鎌倉時代の故

実書である『拾芥抄』にも認められ、ある程度の広がりをもっていたことが知られる。

ここで、「平家納経」が奉納された厳島神社について考えると、その祭神である伊都伎島神は『撰集抄』に「女房神」とあり、女神であることがわかる。また、伊都伎島神は平安時代中頃から習合したと見られるが、その本地²⁹仏として、観音と胎藏大日如来の二説が唱えられた。観音であると明確に記す史料は、長寛2年の「清盛願文」が初例とされる。承安元年（1171）の「伊都岐島社神宝調進状」には「御正体鏡三面 大日 十一面 毘沙門」とあり、また承安4年（1174）の「建春門院詣厳島願文」には「それ当社は内証をたずぬればすなわち大日なり、日域の皇胤を祈るに便あり、外現をおもわばまた貴女なり」とあり、伊都伎島神の本地は大日如来であり、皇胤の誕生を助け、それは高貴な女性の姿で外現するとされている。同様の記述は治承4年（1180）の『高倉院厳島御幸記』にも見られ、「けだかき女房」の姿で伊都伎島神が登場する。さらに『源平盛衰記』になると伊都伎島神を「紅の袴著たる女房の、世にもうつくしくおはしける」姿としており、これは、まさに「平家納経」にあらわれた黒齒のイメージに一致するものであろう。

以上で記した「平家納経」における羅刹女の和装化の仕組みをまとめると、胎藏大日如来を仲立ちとして黒齒と伊都伎島神とが同体となり、その伊都伎島神は女神であり、気高い女房の姿で人々の前にあらわれる。このように「平家納経」の羅刹女は、伊都伎島神を象徴し、その和装化はその外現の姿をあらわすために要請されたものと捉えることが出来よう。そして、これを繰り返す描くことは伊都伎島神を賛嘆するものとなったと考えたい。以上から、「平家納経」の和装した羅刹女のイメージ形成には、第一に日本の神に対するヴィジョンが深く関わるということが理解されるだろう。これは「平家納経」における対内的なヴィジョンと位置づけることができる。では、対外的なヴィジョンについてはどうだろうか。イメージに立ち戻って考えてみたい。

本稿で取り上げた羅刹女以外のいくつかのイメージにおいて「平家納経」が対外的なヴィジョンを有していることは既に指摘されているところである。

具体的には「普門品第二十五」の見返絵の内容が、北宋に漢訳された『大乘莊嚴寶王經』に説かれる観音救済譚³⁰によることがあり、その背景には平清盛の法華經を通じた対外交流の意識³¹が、宋の海商の厚い信仰をうけた観音をめぐる救済譚として端的にあらわれたものと見るのが出来よう。また、「信解品」等の見返絵の蓮池図などに宋代絵画の影響があらわれていることも指摘³²されている。ここでは和装の羅刹女が描かれた「従地涌出品」においても対外的なヴィジョンが存在していることを簡単に指摘しておきたい。ここで注目したいのは、羅刹女が描かれた地が銀砂子を厚く蒔くことでまるで鏡のような銀色の輝きを有していることである。これに関して、呉越国で活躍した永明延寿（904～975）の事績をまとめた『智覚禪師自行録』に普賢菩薩の世界を「銀色世界」とする記述があることが想起される³³。普賢菩薩と銀色を結びつける説が他にあるか寡聞にして知悉していないが、我が国においては、12世紀中頃の「久能寺經」のうち「普賢菩薩勸発品第二十八」の見返絵に銀泥線による普賢菩薩が描かれており、その銀砂子の多用と共に普賢菩薩を銀色で象徴する感覚のあったことが知られる。同様に「従地涌出品」における銀地の採用は、和装の羅刹女が普賢菩薩と結びついた存在であることを視覚的にあらわすためになされたものである可能性があろう。そして、このような意識に立ってみると、「観普賢經」見返しの黒齒も銀を多用した砂子、霰箔、野毛の中に立ち現れてくることがわかる。この点において、「平家納經」の和装羅刹女にも、また対外的なヴィジョンが備わっている可能性を想定してもよいだろう。

おわりに

以上で概観したことから、対内、対外の二つのヴィジョンをもってイメージ化された法華經を供養するという構想が「扇面法華經冊子」と「平家納經」において共有されていることがわかった。この共通性を生み出す端緒となったのは、「扇面法華經冊子」が供養された場に平清盛とその構想を支えたであろう願文の起草者である藤原俊憲が列なったことにあったと推察

される。そして、その構想を後押ししたのは、平清盛の中に芽生えつつあった自らを藤原道長になぞらえるという意識であったように思われる。この点について、治承3年(1179)12月、後の安徳天皇に、清盛が宋から新たに取り寄せた『太平御覧』を献上したことが、万寿2年(1025)7月藤原道長が、新渡の『白氏文集』他を後の後朱雀天皇に献上したことを標榜したものであったことが、同時代史料である藤原忠親『山槐記』に指摘されていることは注目されよう³⁴。すなわち、対外交渉の掌握を背景とした外戚としての行動に共通性が認められるということである。そして、清盛が「平家納経」を奉納した伊都伎島神が「皇胤」の誕生を助ける神とされていたことは先に見た通りである。

この小稿では、主として「扇面法華経冊子」及び「平家納経」に見られた羅刹女の和装化という事象を通じて、そのイメージを生成した対内、対外的な自己認識をヴィジョンとして抽出し、我が国を代表する二つの装飾経についてその共通性を想定した。もちろん、この二者にはここでの議論に収まらない差異も存在する。その具体的な様相とそれが有する意味については、さらに考究してゆきたいと考えている。はなはだまとまりのない内容であるが、今後の研究への問題提起となれば幸いである。

■ 註

- 1 我が国における普賢菩薩画像の展開については、増記隆介「普賢菩薩画像論」(『特別展 普賢菩薩の絵画』展覧会図録、大和文華館、2004年)を見よ。また、主要参考文献については同論文末の主要参考文献を参照。
- 2 註1増記論文、及び増記隆介「普賢十羅刹女像の成立をめぐる諸問題」(『特別展 国宝寢覚物語絵巻』展覧会図録、大和文華館、2001年)を参照。
- 3 忠尋『法華文句要義聞書』第一「一代の経に十羅刹と云う事これなし、此経(筆者註＝法華経)に限りこれを説く、覚大師普賢道場に此神を勧請し、行者の外護を祈る」(『大日本仏教全書』本)。
- 4 鶴林寺太子堂の堂内荘厳画をめぐる近年の議論については、林温「鶴林寺太子堂内陣

- 莊嚴の意想」（『仏教芸術』第296号、2008年）を見よ。
- 5 博多地域における経塚と宋人との関わりについては、『首羅山遺跡 福岡平野周辺の山岳寺院』（久山町教育委員会、2008年）を見よ。また、経筒埋納と宋代仏教との関わりについては、『特別展 聖地寧波』展覧会図録（奈良国立博物館、2009年）を併せて参照のこと。
 - 6 柳澤孝「扇面法華経冊子の成立をめぐる諸問題」（秋山光和・鈴木敬三・柳沢孝『扇面法華経の研究』、鹿島出版会、1972年）。
 - 7 これら二つの作例に関する筆者の既発表研究として、「和装十羅刹女像の図像形成に関する研究——扇面法華経冊子・平家納経を中心に」（『鹿島美術研究』年報第21号別冊、2004年）がある。
 - 8 近年、羅刹女の和装化に関する研究は一段の深まりを見せており、殊に源氏一品経供養をめぐる、安居院唱導との関わりが注目されている。そこでは、一品経をも含めた儀礼の場における莊嚴のありようが本尊画像に及ぶ様が議論されており、筆者も多く示唆を受けた。このような研究に先鞭を付けたものとして、小井川理「平安時代一品経供養と普賢菩薩画像制作について」（『美術史学』第24号、2003年）があり、武笠朗「源氏供養と普賢十羅刹女像」（『源氏物語と江戸文化 可視化される雅俗』、厚德社、2008年）、中村暢子「益田家旧蔵『普賢十羅刹女像』の和装本成立史上の意義——源氏一品経供養との関わりから」（『美術史』第168号、2010年）が参照されるべきである。
 - 9 註6 柳澤論文参照。
 - 10 『図画見聞誌』巻六「（前略）謂之倭扇、本出於倭国也。近歳尤秘惜、典客者蓋稀得之」（『画史叢書』本）。『画継』巻十「倭扇以松板両指許、御畳亦如摺疊扇者（中略）甚精妙」（『画史叢書』本）。
 - 11 『嘉泰普燈錄』巻二十「淳熙乙未、與其国僧統、遣僧訊海、副以水晶降魔杵及数珠二臂綵扇二十事、貯以宝函」（『大日本統藏經』巻79）、横内裕人「自己認識としての顕密体制と『東アジア』」（同氏『日本中世の仏教と東アジア』、塙書房、2008年）参照。
 - 12 白畑よし『扇面法華経下絵、経文字解』（私家版、1989年）。
 - 13 高木豊『平安時代法華仏教史研究』（平楽寺書店、1973年）。
 - 14 梶谷亮治「我が国における仏教説話絵の展開」（『仏教説話の美術』、思文閣出版、1996年）。
 - 15 白畑よし「法華経歌絵について」（『美術史学』88、1944年）。

- 16 中島博「やまと絵の花鳥における宋画の影響について」(『花鳥画の世界』1、学習研究社、1982年)。
- 17 小川裕充「黄筌六鶴図壁画とその系譜(上)」(『國華』第1165号、1992年)。
- 18 上川通夫「一切経と中世の仏教」(『年報 中世史研究』24、1999年)。
- 19 橋本義彦『藤原頼長』(吉川弘文館、1964年)。仁平2年における「扇面法華経冊子」制作への藤原頼長の積極的な関与を認めた説として、江上綏『日本の美術 397 料紙装飾 箔散らし』(至文堂、1999年)がある。
- 20 今日右府於東三条殿被行季御読経(中略)御堂以後未被行云々。(『史料大成』本)。
- 21 一日辛亥、辰刻臨東河修祓了参法成寺始行法華講百日(中略)件法華講近代不行、今復旧也。(『史料大成』本)。
- 22 五日辛巳、於東北院行十種供養(本口例勤而七十年以未絶不行今復例)(〈 〉内は割注、以下同様)(『史料大成』本)。
- 23 『台記別記』仁平3年(1153)11月29日条「廿九日癸丑、帰京、其次着宇治、于時彼相国生年三十四左大臣内覧無隨身(長徳四年三月十二日辞隨身、長保元年三月十六日返給)今年予三十四、年齢官職及一無相違尤可喜悦」(『史料大成』本)。
- 24 梶谷亮治「平家納経と平安文化」(『厳島神社国宝展』展覧会図録、奈良国立博物館、2005年)。
- 25 『兵範記』仁平2年9月10日条「十日辛丑(略)今朝、一院、高陽院、美福門院、御幸天王寺、左府、新大納言、中納言家成、修理大夫忠能卿等参入、両院御共殿上人十三人(資賢朝臣、清盛朝臣、家明朝臣、保成朝臣、成親、光保、頼実、信頼、信隆、信盛、頼盛、俊憲、親信、信西入道)(後略)」(『史料大成』本)。また、藤原俊憲を含む信西一門と当該期の造形との関わりについては、マイケル・ジャメンツ「信西一門の真俗ネットワークと院政期絵画制作」(『鹿園雑集』第10号、2008年)を見よ。
- 26 増記隆介「益田家旧蔵普賢十羅刹女像について」(『美術史家大いに笑う 河野元昭先生のための日本美術史論集』、ブリュッケ、2006年)。
- 27 増記註1、註7論文参照。
- 28 『五十卷鈔』第12「本身事」(建仁3年=1203年奥書)「十羅刹女変化身。一名藍婆者東方宝幢如来变化身也。(中略)五名黒齒者中央大日如来变化身也(後略)」(『真言宗全書』本)。
- 29 松岡久人『安芸厳島社』(法蔵館、1986年)。
- 30 註14 梶谷論文参照。

- 31 平清盛の法華經信仰と対外交渉との関わりについては、高橋昌明『平清盛 福原の夢』（講談社、2007 年）を参照。
- 32 梶谷亮治「国宝『平家納経』図版解説」（『あなただけの法華經』、小学館、2001 年）。
- 33 文冲『慧日永明寺智覚禪師自行録』「第二十三午時礼懺悔師銀色世界大行普賢菩薩摩訶薩普願一切法界衆生了罪性空成無生懺」（『卍統藏經』本）。
- 34 『山槐記』治承3年12月16条「十六日己亥、天晴、今曉東宮行啓于外祖父入道太政大臣八条亭（略）有御送物、摺本太平御覧（此書総数三百卷也、卷三帖裏之不入筥、自大宋国送禪門、未渡本朝書也、後朱雀院儲君之時、万寿之比自御堂有送物、摺本文選文集云々、具見經頼卿記、蓋被迫彼例也）（後略）」（『史料大成』本）。

（ますき・りゅうすけ 文化庁美術学芸課文化財調査官）